

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第156回 がんばれ！「ちょボラ」～誰でも何時でも、ちょっとしたボランティア

2006.7.2

「ちょボラ」、実はこれ、「ちょっとしたボランティア」のこと。たとえ1時間でもいいから、自分にもできること、関心のあることから始めてみようという意味。まとまった時間がなくてとか、何か資格や特技がないとダメじゃないのと思っているアナタ。誰でも、どこでも、いつでも、気負わずに「ちょボラ」精神。さあ、あなたは、どんな「ちょボラ」からはじめますか…。こんなキャッチフレーズで、今「ちょボラ」が流行っている。

例えば、「おばあさんに声をかけて、助けてあげる」「自転車を片づける」「外国の人に道を教えてあげる」「車いすの人を助けてあげる」等々、普段、全く無関心だった人が、こんなちょっとした行動をとることにより、いかにもボランティア活動を実践した充実感を味わう。なんだか自己満足の域を脱しきれないようだが、いやいや、決して^{あなど}侮るなかれ、基本的には社会奉仕、世の中に「貢献する」良い事に間違いない。

そしてこの「ちょボラ」運動、サラリーマンや主婦、学生たちに大流行の兆^{きざ}しが見え、全国至る所でグループが誕生し、今や一つのパワーになりつつある。

ある街ではこの「ちょボラ」グループとタイアップし、街づくりや商店街活性化の起爆剤として動き出した。「ちょボラ」とNPO（特定非営利活動法人）が組んで、地域の介護運動、あるいは防犯パトロール活動をやっている事例報告もある。

精神的バックボーンが希薄になった現代日本の中で、何かに^{すが}縋り、何か^{よりどころ}拠り所を求め、若者も、年寄りもさまよい続けている。とりわけ自虐的精神構造を持つ者が多い日本人は、自分自身の不甲斐なさから、せめて何か良いことをして、自己実現の欲求^{かな}を叶わせたいと願う。そんな傾向が「ちょボラ」現象を生んだり、NPO活動の活発化を招いたりしているのかもしれない。漠然とした不安感を払拭し、せめて自分自身の存在感を確かめ、どこかでホット安堵感を味わいたい…そんな気持ちの表れかもしれない。

加えて、終身雇用制や定年制の改変は、旧来の雇用形態の常識を大きく変えざるを得なくなる。少子高齢社会の到来を目前に控え、慢性的労働力不足時代へ突入する今、この時、未だに有効的施策の構築ができないでいる。

片方で、団塊の世代がリタイアメントする2007年問題、もう、来年以降の社会環境は、益々この傾向を助長するに違ひなく、経済や雇用問題に関わらず、福祉や医療・介護、文化や社会コミュニティ等々あらゆる分野に多大な影響を及ぼすこととなる。

「ちょボラ」やNPOに^{すが}縋りたくなくなる心境、何となく分かるような気がしてきた。

昔、若干胡散臭い爺さんと、高見^{うさん}某^{なにがし}なる相撲取りが出てきて、「一日一善」と叫ぶテレビコマーシャルがあった。どこから見ても偽善的としか見えなかったCMとは雲泥の差、「ちょっとしたボランティア」に寄せる期待は大きいと言える。